



やどかり研究所

第10回(2011年度)やどかり研究所報告・交流集会のご案内

日 時 2012年2月25日(土)9時30分～ 2月26日(日)正午まで

*2月25日(土)17時30分から懇親会を行います。

会 場 やどかり情報館 2階ホール(さいたま市見沼区染谷1177-4 Tel 048-680-1891～1892)

主 催 公益社団法人やどかりの里 やどかり研究所

第10回やどかり研究所・報告交流集会を開催します

2011年3月11日、東日本を襲った大震災は人々の暮らしに深刻な被害をもたらし、今なお被災地は厳しい状況にあります。大地震、大津波の被害はもちろんのこと、福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染問題は深刻で、職を失ったり、県外への避難を余儀なくされ家族がバラバラになるなど、暮らしの様相を大きく変えました。その事実は重く、震災後の生活の立て直し、さらに原子力問題から目をそらすことなく、私たちがどんな社会で暮らしていきたいのか、どんな未来を描くのか、今改めて問われているように思えます。

一方、2011年度は障害者基本法の改正とともに、障害者総合福祉法(仮称)づくりが進められ、障害者権利条約の理念、障害者自立支援法違憲訴訟団が国と交わした基本合意文書を基本とし、障害のある人の権利を真ん中に据えた制度改革の議論が進められてきました。今こそ、真に障害者制度改革が進むのか、私たちの力を結集させていく時でもあります。

未曾有の被害をもたらした大震災後の社会のあり方、権利を中心に据えた制度改革の取り組み、これらは、私たちが10年後、20年後……どんな社会で暮らしていきたいかを描き出すことでもあるのではないのでしょうか。

年度末の2日間、一旦時間を止め、さまざまな実践、研究報告を行いつつ、私たちの生き方、暮らし方、働き方をともに議論し、考えていきたいと思えます。

参加費 研究所会員は、2,000円(資料代として) 会員でない方は、参加費5,000円となります。

昼 食 600円(2月25日(土)のみ) 飲み物付きをご用意しております。

懇親会費 3,000円

参加の申し込み

* 申込用紙にご記入の上、お申し込みください。

* 参加の申し込みの締め切り日は、2012年2月18日(土)です。

プログラム

2月25日(土)

9:00～9:30 受付

9:30～9:45 開会あいさつ

2011年度やどかり研究所事業報告

9:45～10:20 情勢報告

10:20～11:45 会員による研究・実践報告と討論・I

(*発表順は当日変更することもあります。ご了承ください)

1) 在宅中心の生活をおくっている人の実態把握と支援のあり方

－精神疾患のある人を対象に－

○渡邊 奏子(浦和区障害者生活支援センターやどかり)

<共同発表者>三石麻友美 大澤 美紀 野田 妙子 玉手 佳苗 宇賀神絵里
鈴木 裕貴 大庭 美聖

<要旨>

やどかりの里は、地域精神保健福祉活動を40年にわたり行っており、様々な資源を地域に点在させ、総合的な支援活動を展開してきた。しかし、2010年度末時点で、やどかりの里の各資源に登録をしながらも、在宅中心の生活を送っている人が登録者全体の約18%を占めている。社会的に問題となっているひきこもりの状態にある人の中には、一定数の精神疾患がある人が含まれていることが指摘されているが、有効な支援が行われていないのが現状である。本研究では、在宅中心に生活をおくっている精神障害のある人が、社会と継続したつながりを持って暮らしていくためには、やどかりの里としてどのような支援を展開できるのかを導き出していくことを目的とする。今回はその中間報告を行う。

2) 障害年金に着眼した精神障害者の生活支援論

○青木 聖久(日本福祉大学)

<要旨>

精神障害者の生活支援には、所得保障をすること、居場所を確保すること、地域生活支援体制を構築すること、の3つが必要だと考える。なかでも、所得保障は、生活基盤を整えるという意味において、最も不可欠な要素であるといえる。ところが、所得保障、とりわけ、その中心に位置付けられる障害年金を受給していない精神障害者は多い。筆者は、精神障害者が障害年金を当たり前を受給できていない実態を看過できない事柄だと捉えた。そして、精神障害者が障害年金を受給できるための方途を検討し、その解決に向けて、精神障害者、家族、PSW、障害年金を専門とする社会保険労務士等に対して、アンケートやインタビュー調査を実施した。本稿は、これらの調査結果や考察を通して、精神障害者の生活支援論の構築を試みようというものである。

3) 東日本大震災における心理社会的サポート

－日本国際民間協力会（NICCO）による被災地支援の活動報告－

○東田 全央（公益社団法人日本国際民間協力会（NICCO））

＜要旨＞

2011年3月11日に起きた東日本大震災により東北沿岸部は甚大な被害を受けました。日本国際民間協力会（NICCO）は地震発生2日後より、岩手県および宮城県の被災地に入りました。そして地域のニーズに合わせて、継続して包括的な支援事業を展開してきました。本報告では、5月より継続実施している心理社会的サポート事業について取り上げます。この事業の目的は、避難所および仮設住宅団地における住民の災害ストレスの軽減と孤立化を防ぐことです。地元の住民と専門家とともに、どのように活動してきたのか、当日は、事業の内容と経過、見えてきた課題、教訓等について報告します。

11：45～13：00 休憩（昼食）

13：00～17：00 特別報告

3.11 大震災から私たちが学ぶこと 考えること 行動すること

第1部 大西暢夫さんと南相馬市の大石万里子さんからの報告

今回の特別報告は、写真家の大西暢夫さんと福島県南相馬市の保健師大石万里子さんをお迎えします。後半の公開座談会では実践報告をしていただいた東田全央さん（日本国際民間協力会）にも加わっていただき、フロアからの発言も交えながら、話し合っていきたいと思っています。

報告1

大西暢夫さんの語る 3.11 東日本大震災 私たちができることは

大西暢夫さん（フリーカメラマン）

大西さんは、ダムに沈んでしまう村や精神科病院に入院している人たちを長年にわたって取材され、人々の暮らしを見つめ写真を撮り続けています。3月11日の大震災以降は、茨城県から岩手県までの被災地域に何度も足を運び、取材を続け、義援金を集めて届ける活動をされています。彼は、大震災後に「この社会に生きる誰もが担える役目」があると言います。被災地の状況を風化させないため、自分たちができることを考えるため、地元岐阜では定期的に報告会を開いています。

当日は、大西さんが被災地で目にした現実、胸に抱いた思いを率直に語っていただきます。併せて、被災地や取材を通して出会った人々をとらえた写真も展示いたします。

報告2

大石万里子さんの語る 3.11 東日本大震災 住民とともに

大石万里子さん（南相馬市健康福祉部主任保健師）

大石万里子さんは、地震と津波、そして原発事故に見舞われた南相馬市の原町保健センターで働く保健師です。住民のいのちと暮らしを守る地域の第一線機関で、震災後も保健師としての活動を続けてきました。原発から20キロから30キロ圏内にある自宅は避難区域となり、大石さんは南相馬にとどまりましたが、家族は避難し、家族ばらばらの暮らしを余儀なくされました。5月の連休に入って休みが取れ、被災後やっと涙を流すことができ、ようやく自分を取り戻したと言います。保健師として、南相馬の住民の1人として、大石さんの3.11、それ以降を率直に語っていただきます。

第2部 公開座談会 私たちは何を見つめ 何を学んだのか

話し手 大西 暢夫さん 大石万里子さん 東田 全央さん
司会 増田 一世（やどかり研究所事務局長）

被災地での支援活動について実践報告していただいた東田さんを交えて、それぞれの体験を踏まえて、今何を感じ、何を考えているのか、互いの報告を聞きつつ感じたことなどを話し合ってください。そして、参加者のみなさんとともに大震災を経験した私たちがなすべきことは何か、震災後の人々の暮らしの現実を受け止め、これからの私たちの生き方、社会のあり方をともに考えていきたいと思えます。

17:30～19:30 懇親会（おいしいお食事を囲んで交流してください）

2月26日（日）

9:30～10:50 会員による研究・実践報告と討論・Ⅱ

4) 精神障害からのリハビリを促進する援助者の要因

○岩井 和子（茨城県立医療大学 作業療法学科）

<共同発表者>松田 花織

<要旨>

精神障害からのリハビリを促進する援助のあり方を検討するため、援助を経験した当事者を対象に、求められる援助者の要因について半構造化面接を行い質的に分析した。

精神障害からの回復には、「症状の不安定・引きこもり」「迷いながらの行動」「積極的な行動」の3つの段階があることが示唆され、こうした時期に応じた援助のあり方の重要性が確認さ

れた。精神症状の影響を強く受け、自己認識や統制感覚が失われている回復初期段階では、「生活基盤の安定」「精神的安定・安心」「疾病への対処」「楽しみへの誘い」という当事者の安心や安定を支える援助が重要であり、迷いつつ社会との関わりを取り戻そうとする段階では、「情報提供」や「実質的な援助」が重要であり、また、より積極的な行動の段階では、「信頼・認める」「喜びや感謝を伝える」といった当事者が自らの役割や自己効力感を認識でき、自尊心をより高めることのできる援助が重要であった。

5) 「地域で生きる」を支援することとは

～変化するニーズから‘地域ケア’のあり方を考える～

○大澤 美紀（大宮区障害者生活支援センターやどかり）

—<要旨>—

やどかりの里は、精神障害者の‘ごく当たり前の生活’を目指して活動を開始しました。活動開始からの40年、目まぐるしく動く社会情勢の中で、障害のある人たちの変化するニーズに対応すべく、民間アパートを借り上げ、職員が訪問しながら支援する形態のグループホームを地域に点在させ、現在55名の人がグループホームを利用して地域生活を送っています。2004年からは新たに体験型住居の取り組みを行い、家族同居から1人暮らしへ自立へのチャレンジを支援してきました。

障害のある人たちが「地域で生きる」ことを支援するこうした取り組みは、新たな社会資源の創出が求められ、私たちにとっても試行錯誤とチャレンジの連続でした。本報告では、精神障害のある人たちが「地域で生きる」を支援するとはどのようなことなのかについて、7年間の活動を報告し、今後さらに求められてくる高齢化、障害の重度化への対応や、社会や地域との関わりの中で暮らしを支える新たなシステムづくりに向けた課題提起を行いたいと思います。

6) 「自立支援」を再考する：コミュニティ、エンパワーメント型地域生活支援の提起に向けて

○向井 健（北海道大学大学院）

—<要旨>—

近年、「自立支援」という言葉が巷で溢れるようになった。しかし、それらのアプローチの多くは、困難をかかえた個体の能力の向上や改善に力点が置かれるものである。そうした個体還元主義的なアプローチが、本人の困難を増幅させてしまう限界は明らかであるが、それへの対案をどのように創出していくかは、実践的な課題として残されているように思う。そこで本報告では、本人と本人をとりまく資源との間を媒介する場（コミュニティ）自体に支援の力点をおく援助モデルを提起したい。

参加費 研究所会員は、2,000円（資料代として）
会員でない方は、参加費 5,000円となります。

昼食 600円（2月25日（土）のみ）飲み物付きでご用意しております。
* やどかり情報館付近に昼食等とれるお店やコンビニはありません。
あらかじめご用意されるか、当方で用意するお弁当をご利用ください。

懇親会費 3,000円

参加の申し込み

- * 参加を希望される方は、参加申込書にご記入の上、お申し込みください。
- * 参加の申し込みの締め切り日は、**2012年2月18日（土）**です。
- * キャンセルは、2月22日（開催日3日前）までにお申し出ください。それ以降に申し出があった場合、資料代として実費2,000円を申し受けます。あらかじめご了承ください。

会場案内図



お申込み・お問合せ

やどかり研究所事務局

TEL：048-680-1891 FAX：048-680-1894

E-mail：johokan@yadokarinosato.org

〒337-0026 埼玉県さいたま市見沼区染谷1177-4



2011 年度やどかり研究所報告・交流集会
参加申込書

申し込み日付 月 日

会員区分

研究所会員 ・ 一般

何れかに○で囲んでください

氏名

所属

連絡先

住所

電話番号
FAX 番号

E-mail

昼食 (600 円)

申し込みます ・ 申し込みません

何れかに○で囲んでください

懇親会 (3,000 円)

参加します ・ 参加しません

何れかに○で囲んでください

通信欄

上記申込書の必要事項を記入の上, Fax (048-680-1894), もしくは E-mail (johokan@yadokarinosato.org) にてお申し込みください. 申し込みの締め切りは, 2012年2月18日(土) です.